

平成 21 年 5 月 12 日現在

研究種目： 基盤研究（C）
研究期間：2006～2008
課題番号： 18520244
研究課題名（和文） 写本テキスト学におけるヴァリアントの総合的研究
- 中世南仏抒情詩の場合
研究課題名（英文） Variante Studies of the Manuscripts in the Occitan Medieval Literature
研究代表者
瀬戸 直彦（SETO, Naohiko）
早稲田大学・文学大学院・教授
研究者番号：30206643

研究成果の概要：

従来より私の進めてきたフランス中世抒情詩の写本についての研究を土台として、ペイレ・ヴィダル、ガウセルム・ファイディットという2名の詩人のテキストにつき、そのヴァリアントのテキスト解釈上での取り扱い方を研究した。2年目には、トルバドゥールの語彙集の電子テキストを編纂されたリケッツ教授を招聘して講演をおこなって頂いた。3年目には、研究成果を第9回オック語オック文学研究集会で発表し、ヴァリアントの研究の重要性と、今後のその問題点を確認することができた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	600,000	0	600,000
2007年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	660,000	3,460,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：ヨーロッパ語系文献学、フランス中世文学

1. 研究開始当初の背景

中世の詩人たちの作品は、写本というメディアにより今日まで伝えられている。このメディアは、羊皮紙に写字生によって手書きで書かれていること、詞華集（アンソロジー）の形で伝えられたこと、それらの写本の制作の経緯が近世以降の書誌情報とことなり、ほとんど不明であることなどにより、近現代の作品とは一線を画している。私の専攻分野であるフランスの中世抒情詩においては、ほかの分野においても同一の事情が介在することと思われるが、特定の作者の作品は、複数の写本にそれが残されている場合、異本（＝校訂の底本以外の写本）と、異文（＝校訂のもとになったテキストに採用されなかった、他写本の読み）が存在することになる。

従来の私のこの方面についての研究を一瞥しておく。以上のような側面から、フォルケット・デ・マルセイヤ（13世紀初頭にトゥールーズ司教に就任したトルバドゥール）の校訂を試み、C写本（フランス国立図書館フランス語写本856）をもとにそのテキストを校訂したのがパリ大学に提出した博士論文であった。その後、ここ10年ほどは、抒情詩に特徴的な詩法に属する、トルナーダ（反歌）と、セニャル（詩を献呈する相手の名を仮の名で呼びかける習慣）につき、主としてベルナルト・デ・ヴェンタドルンの作品をもとに、残されたテキストが伝本のうえでいかに異なるか、それが全体的な解釈にいかにかわるかを軸として考究してきた。

今回の研究では、1190 - 1210年ころに南仏で活躍したペイレ・ヴィダルとガウセルム・ファイディットという抒情詩人のテキストをもとに、従来より研究を進めてきたC写本の読みを中心に、異本と異文の相違を詳細に調査・検討してみようとした。それぞれが40作品以上残存しており、写本による伝承の形態もさまざまであって、格好の材料を提供してくれるからである。

前者については、1864年にドイツの文献学者カルル・バルチュが、この詩人の作品をもとに、トルバドゥールの最初の本格的な校訂版と呼ばれるテキストを編纂し、その後20世紀のはじめにエルネスト・エップネル（ストラスブール大学）が、バルチュの校訂を基礎にフランス語による解説を付した校訂を出している。そして1960年代には、イタリアの新ラハマン法の強力な推進者であるガルコ・スィルヴィオ・アヴァッレが、各写本の読みから、いちばんオリジナルに近いものを選ぶ仕方新しい校訂版を出版しているから、ヴァリエーションの扱い方の比較をする場合にきわめて興味深い。

後者については、作品数が多く校訂は長年待望されていたが、1960年代

にフランスでジャン・ムーザによる校訂が出た。しかしながら、これはさまざまな問題を含むテキストであり、私がじっさいに写本に当たる場合でも、かなりの訂正を付さなくてはならず、これはこれで仕事として興味深いものになるであろう。

以上より、これら2詩人の異本と異文をさまざまな面で扱うことができ、その場合、より広い意味での研究に拡大できるだけの価値が本課題において存在することが予想されたのである。

2. 研究の目的

(1) ペイレ・ヴィダル、ガウセルム・ファイディットという12 - 13世紀のトルバドゥール2名のテキストとその異本・異文を検討する。底本に選んだ作品の写本から、その読みを採用できない場合、その読みをテキスト校訂の *apparatus critique* (APPARATUS CRITICUS、異本・異文欄)の第一段目にし、第2段目には、他写本の読みを、できるかぎりわかりやすい、そして、写本に接することのない者が、各写本の読みをそれだけで再現できるようにする。この、いわば2段がまえの方法が現在では校訂版作成の主流になりつつあるが、これは写本の数が多い場合は至難のわざである。私がすでにフォルケット・デ・マルセイヤの校訂を博士論文として試みたさいに痛感したことで、できるかぎり、1910年にフランスでこのトルバドゥールの校訂をおこなったスタニスラウ・ストロニスキはこの2段構えの方式をとらなかったため、なおさら異本・異文欄が複雑にならざるを得なかったのが実情である。今回の課題では、その正当性を明らかにして、利用しやすいヴァリエーションという方針を実現できるように努力したい。

(2) 中世南仏語語彙集 (Concordance de l'Occitan medieval) (COM) を編纂された、ピーター・リケッツ教授（ロンドン大学名誉教授）を招聘して、パストゥレル（牧歌）についてのコーパスの一覧を示していただくこと、また、そのCOM編纂の意義と具体的な利用法について講演していただく。リケッツ教授とは、1994年から1995年間の在外研究の折に親しくしていただき、ロンドン大学でのセミナーでの発表をさせていただくこともできた、私にとっては旧知の方である。

(3) 2詩人のコーパスのなかより、適当な作品を選択して、異本と異文という観点から、いかに新しい知見を取り入れることができ、これまで等閑に付されてきたヴァリエーション研究から新しい解釈が可能であることを示すために、第9

回のオック語オック文学国際学会（アーヒエン大学で2008年8月に開催予定）で発表する。

3. 研究の方法

(1) 上記の2詩人、ペイレ・ヴィダル、ガウセルム・ファイディットについての写本のマイクロ・フィルム収集。また周辺のトルバドゥール、トルヴェールについての写本ならびに写本の構造に関する研究文献の収集と整理をおこなう。

(2) これまでのこれらの作家についての、研究文献の網羅的な収集。とくに校訂版についてのさまざまな書評の検討。

(3) リケッツ教授による講演とワークショップの開催。早稲田大学文学学術院において2007年11月上旬にパストレルについてそのテキスト研究の成果を踏まえて講演した頂いた。つぎに関西大学で開催された日本フランス語フランス文学会秋季大会のワークショップにおいて、2005年に出たCOM2(中世オック語による、韻文のトルバドゥールの抒情詩テキストだけではなく、韻文のロマンなども校訂されたものすべてを収録する電子テキストの語彙集)の編纂方針と利用の方法をじっさいにパソコンを用いて示していただき、大いに啓発される場所があった。

他のメンバーには、日本国内で中世フランス語・フランス文学に造詣が深く、かつ電子テキストの利用に積極的な後藤齊教授、高名康文教授にご参加いただき、有意義な討論が実現できることを期待している。

(4) 2008年8月にアーヒエン大学において開催された第9回オック語オック文学研究国際学会において、ガウセルム・ファイディットの一作品の解釈を発表。

4. 研究成果

研究1年度目には、ペイレ・ヴィダルの作品を、従来存在する2つの校訂本と、写本の読みとの比較校合をおこなった。エップネルによる校訂は、じつは19世紀のバルチュによる古い校訂を手直したものであること、そしてアヴァッレによる校訂は、とくにイタリアの学界において顕著な新ラハマン法ともいべき方法の具体化であることが確認できた。後者は、作者のオリジナルな読みを、現存写本のさまざまな読みから演繹する方法の具体化であり、問題点(じ

つに細かい作業を、ある意味で機械的におこない、その検証も容易ではないが、けっきょくは仮説に仮説を重ねる推論をもとにしたテキストが出てくる、つまり、じっさいに中世の読者ないし聴衆が接したテキストというよりは、20世紀の研究者が聖書解釈の方法(=カルル・ラハマンによるもの)を応用して作り上げた机上の空論といつては言いすぎかもしれないが)も多く指摘できるが、その意図は尊重すべきであろう。

リケッツ教授のCOM2をじっさいにその場で利用する機会に恵まれたため、既存の校訂版のテキストを即座に閲覧する便利さはもちろんのこと、その限界、つまりヴァリエントを捨象したテキストであることが確認できたのは幸いであった。つまり、ヴァリエントをきちんと把握するには、校訂版そのものが必要であること、しかもその校訂版も、ものによりまた編者により方法論・出来不出来が異なるため、結局は、写本そのものにあたるしか仕方のない場合が出てくるのが痛感された。

2009年度の学会発表では、ガウセルム・ファイディットの旧来の校訂(ジャン・ムーザによる)の不備を指摘し、「若い」「領主権」という表現の意味を探った。その校訂版とCOM2を利用したのはもちろんであるが、やはり各写本テキストの文脈が必要であった。そこから「若さ」という意味の中世における含蓄を導き出すことが可能になった。発表後は、ドミニク・ビー教授(トゥルーズ大学)、ピエトロ・ベルトラミ教授(ピサ大学)、リケッツ教授らから貴重な示唆を受けることができた。この発表の内容は2009年秋に刊行される学会報告集に収録される。

COM3では、中世オック語の散文テキストを収録し(これはほぼ完成しているよし)、さらにその先にCOM4においてリケッツ教授は、各写本の読みまで収録することを計画している。しかしながら、これを実現するためには膨大なデータを対象とするために、時間と予算の関係から、事実上COM4は不可能になりつつあるらしい。それにもかかわらず、そのデモ版をリケッツ教授は示され、ある特定のテキストを開くとその部分の各写本の読みがぎざぎざにキーを押すだけで出てくるという、たいへん便利な、ある意味では理想的な道具となりうるということがわかった。

もっとも、写本の転写の仕方をどう統一するのか、写本の略語をいかにローマ字化するかという問題点、つまり、いわゆるエディション・ディプロマティックにするのか、より解釈をほどこした、なかば「校訂」に近いテキストを載せるのか、微妙な問題であることがわかった。

今後の展望としては、それらヴァリエントを、われわれが、いかに利用するか、いかにこれら

の問題点を意識しながら、有効に研究の進展に寄与させるか、という点を、さらに考慮しなくてはならないと思われる。また、けっきょくは最終的なよりどころとなる各写本の異本・異文を、網羅的に収録することを目的としているリケッツ教授の構想にある COM4 について、なんとか実現への道を模索し、日本の学界からも寄与できる方向を探ることが必要であろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

(1) 瀬戸直彦「封建制語彙の俗語抒情詩への転用 - 「若い領主」(ガウセルム・ファイディット)をめぐって - 」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』(査読なし) 第 53 巻 2 号、2008、pp.85-99.

(2) 瀬戸直彦「ペイレ・ヴィダルの”パレスチナの歌” - baiser vole のモチーフを中心に - 」(査読なし)『Etudes Franaises』(早稲田フランス語フランス文学論集) 第 14 巻、2007、pp.1-33.

(3) 瀬戸直彦「作家主義か作品主義か - ペイレ・ヴィダルの抒情詩の並べかたについて - 」(査読あり)『比較文学年誌』(早稲田大学比較文学研究室) 2007、pp.1-15.

〔学会発表〕(計 2 件)

(1) Naohiko SETO, Le vocabulaire feodale dans Gaucelm Faidit : sur jove senhoratge (PC 167, 52, v.43), 第 9 回国際オック語オック文学研究学会、2008 年 8 月 27 日、アーヒエン大学(Aix-la-Chapelle)

(2) 瀬戸直彦「ワークショップ：中世研究における電子テキストの現状と将来性 - 中世南仏語データベース (COM) 刊行によせて」(パネリスト：ピーター・リケッツ(ロンドン大学名誉教授)、後藤齊(東北大学)、高名康文(福岡大学)、瀬戸直彦(コーディネーター)、日本フランス語フランス文学会秋季大会、2007 年 11 月 10 日、関西大学(大阪))

〔図書〕(計 1 件)

Ed. Angelica Rieger, Actes du 9e congres international de l'AIEO, Aix-la-Chapelle, 24-31 aout 2008, Aachen, Shaker, 2009, pp.42-62 (分担執筆)(査読あり)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

瀬戸 直彦 (SETO NAOHICO)
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：30206643

(4) 研究協力者

ピーター・リケッツ
ロンドン大学名誉教授

谷川 かおる
明治学院大学・非常勤講師